日本行動計量学会　第54回大会

2026年9月1日

スマホ・ケータイ利用に伴う人間関係の変化の類型化
－2003年・2010年・2020年・2025年調査の比較－

〇水野　一成　　（株式会社ＮＴＴドコモ　モバイル社会研究所）
宮原　祐一　　（株式会社ＮＴＴドコモ　モバイル社会研究所）
廣瀬　通孝　　（東京大学　名誉教授）

目的

人間関係に関する設問を基に類型化をおこなう。
過去の調査結果と比較し、現在の特性を考察する。

調査概要

調査時期	2025.1
調査方法	訪問留置調査法
調査対象	関東，15～79歳
割付	性別・年齢・エリア・都市規模
回答数	450

分析の流れ
1.2025年調査を基に因子分析を実施
2.クラスタ分析を実施し類型化
3.因子及びクラスタを2003年・2010年・2020年と比較

スマホ・ケータイ所有推移

年次

2003 2010 2020 2025

ケータイ※1
（94.4%）

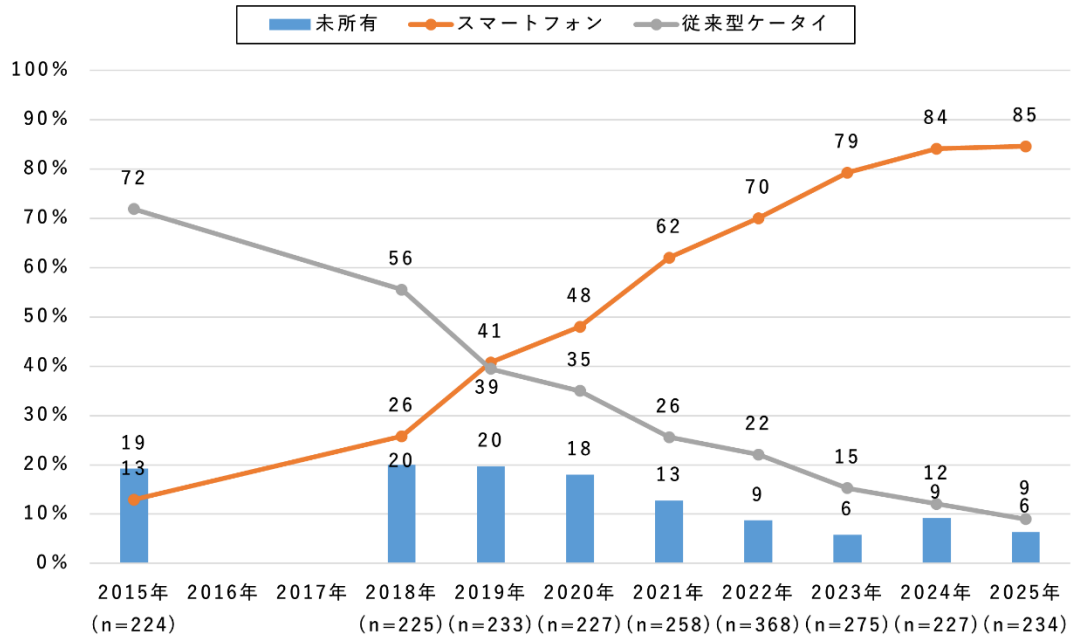
ケータイ
（スマホ4.4% ※2）

スマホ88.9% ※2

スマホ98.0% ※

70代　スマホ所有率
48%→85% ※3

図1　70代スマホ所有率推移



※1　情報通信白書
※2　モバイル社会研究所　経年調査
※3　モバイル社会研究所　シニア調査

因子分析

スマホ・ケータイに利用後の人間関係の変化、計12問4件法で調査→4因子を抽出

	交流深化	交流拡大	使い分け	高機能志向
d.スマホ・ケータイで知人・友人との交流が密になった	0.69	0.33	0.22	0.19
f.スマホ・ケータイで旧友との交流が復活した	0.66	0.22	0.10	0.11
g.スマホ・ケータイでのやりとりで、その人の意外な側面がわかった	0.62	0.27	0.24	0.20
e.スマホ・ケータイで親しい人との交流だけ密になった	0.53	0.19	0.17	0.23
a.スマホ・ケータイで新しい友達ができた	0.32	0.85	0.16	0.16
b.スマホ・ケータイで交際範囲が広がった	0.52	0.69	0.13	0.14
c.スマホ・ケータイのSNSやオンラインゲームを使って新しい友人ができた	0.35	0.69	0.28	0.17
j.相手によって、通話、メール、SNSを使いわけている	0.24	0.09	0.90	0.11
k.内容によって、通話、メール、SNSを使いわけている	0.19	0.12	0.75	0.19
i.相手や内容によって、複数のSNSのアカウントを使いわけている	0.11	0.33	0.60	0.25
o.多少操作が面倒でもいろいろな事ができるスマホ・ケータイの方がいい	0.19	0.14	0.18	0.75
m.少し値段が高くてもいろいろな事ができるスマホ・ケータイの方がいい	0.22	0.14	0.20	0.72
クロムバックのα係数	0.848	0.905	0.841	0.782

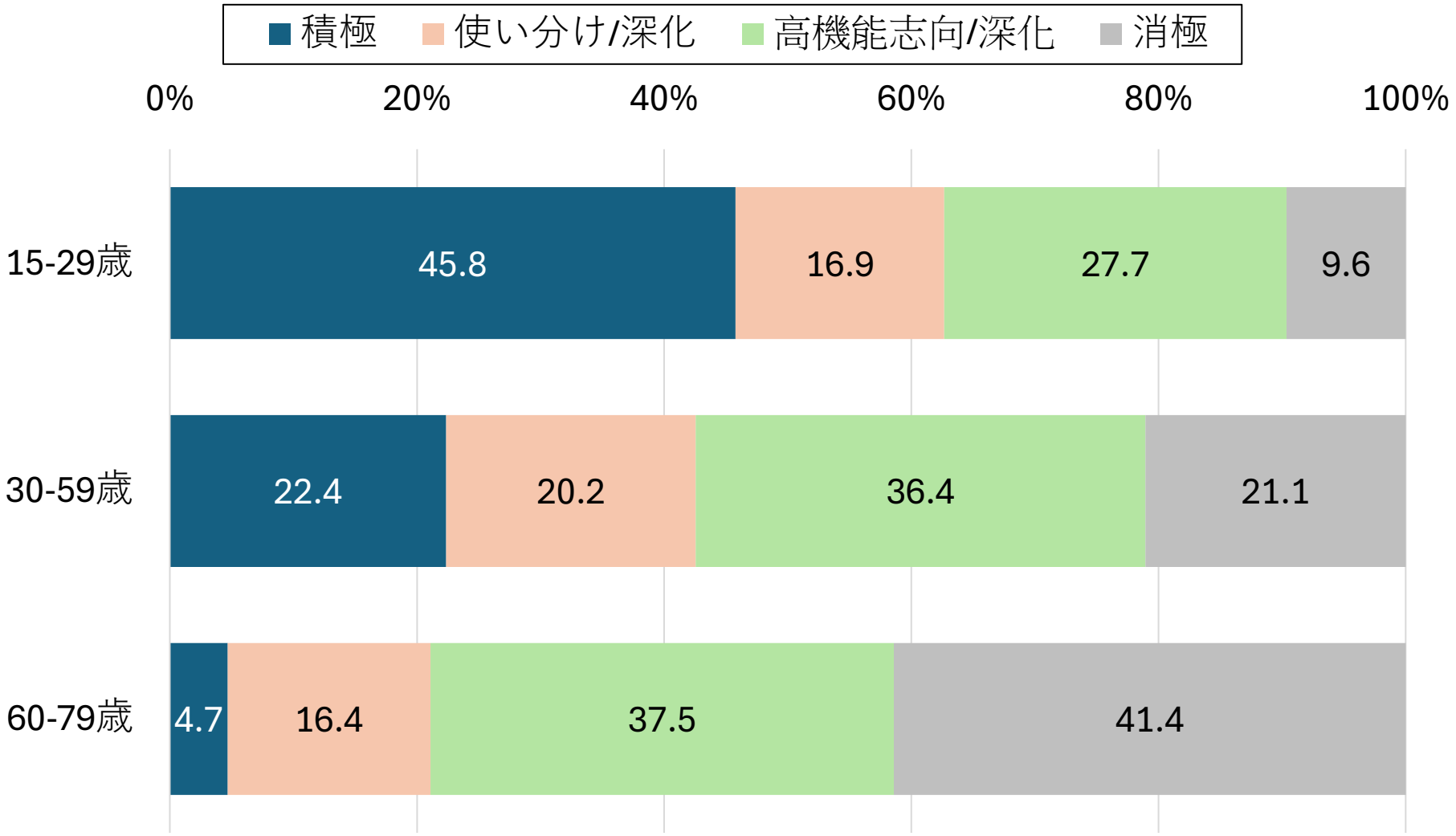
因子抽出法: 主因子法

回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

4クラスタに分ける

		積極	使い分け/深化	高機能志向/深化	消極
因子	交流深化	0.33	0.22	0.22	-0.76
	交流拡大	1.17	-0.83	-0.01	-0.39
	使い分け	0.67	1.06	-0.71	-0.37
	高機能志向	0.13	0.01	0.44	-0.75
回答数		95	81	154	109
構成比（%）		21.6	18.5	35.1	24.8

「夢中」「人物像」は若年層、「消極」はシニア層の割合が多い



因子に変わりはない

2003年調査

交流深化　交流拡大　使い分け　高機能志向

2010年調査

交流深化　交流拡大　使い分け　高機能志向

2020年調査

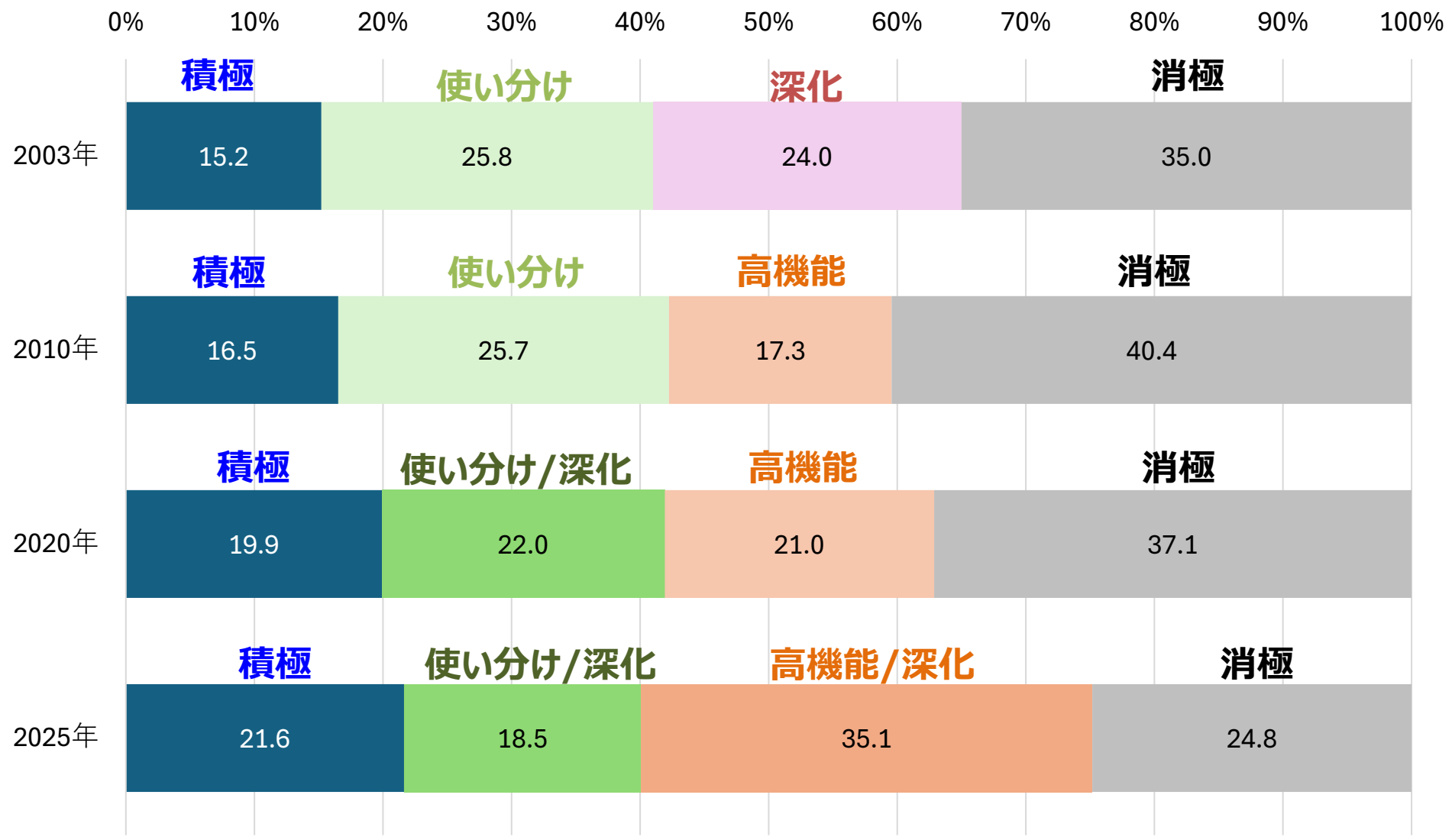
交流深化　交流拡大　使い分け　高機能志向

2025年調査

交流深化　交流拡大　使い分け　高機能志向

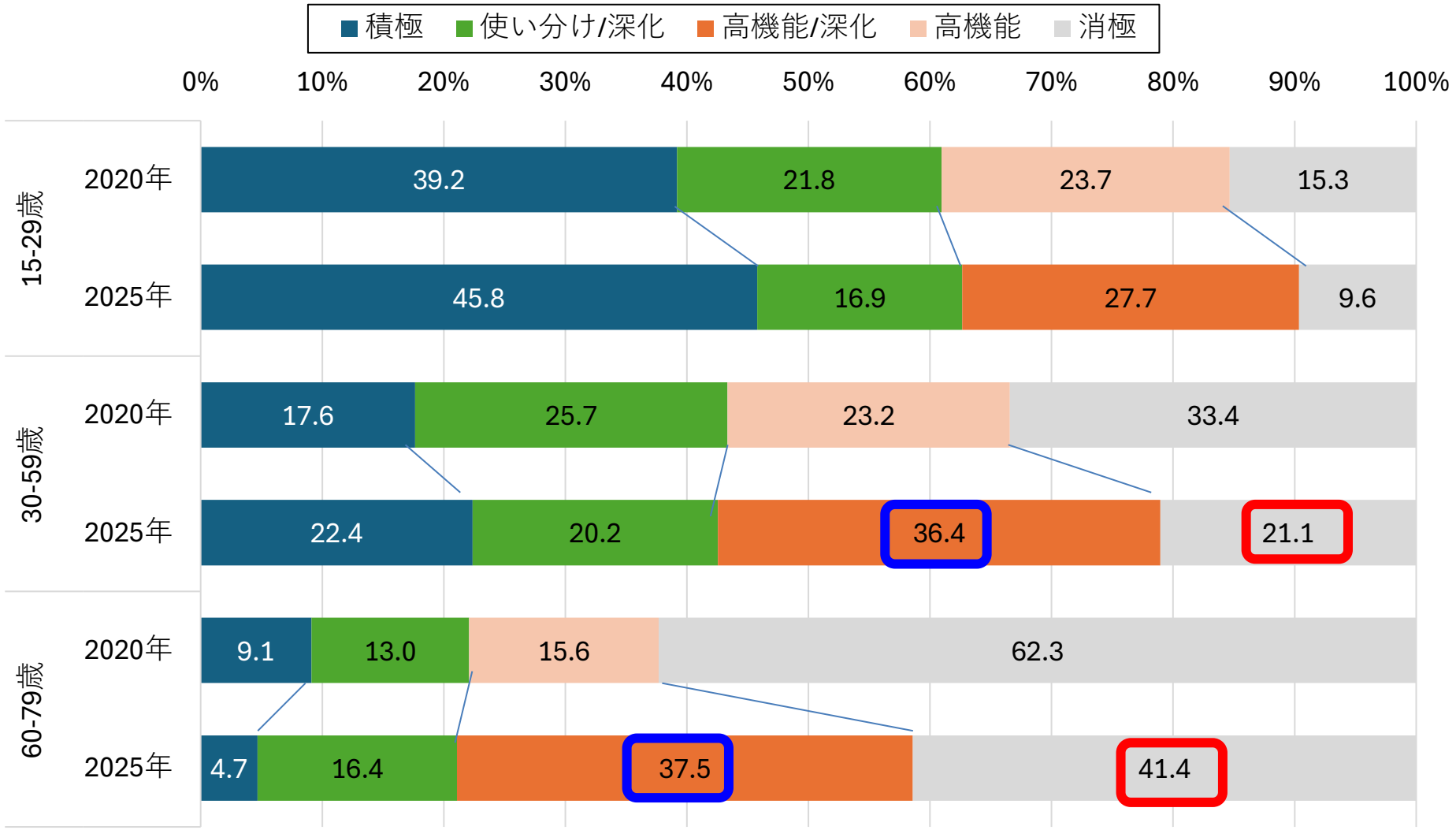
クラスタ　経年変化

この5年での変化・・高機能高機能が高機能/深化に代わる



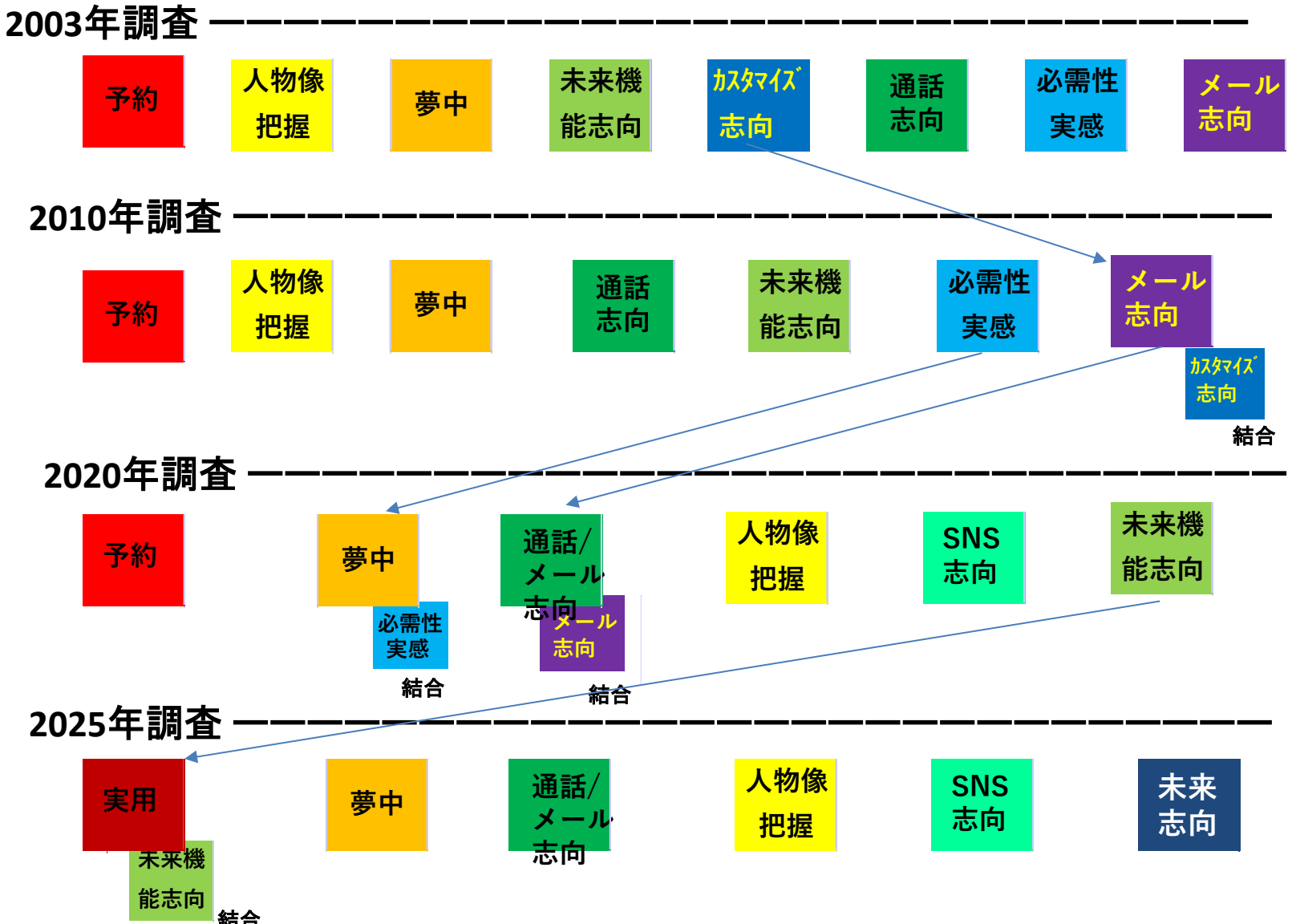
2020年→2025年　年代別変化

この5年の変化・・シニア層・中年層は10pt以上「消極」が減っている。
高機能/深化が3割を超える。



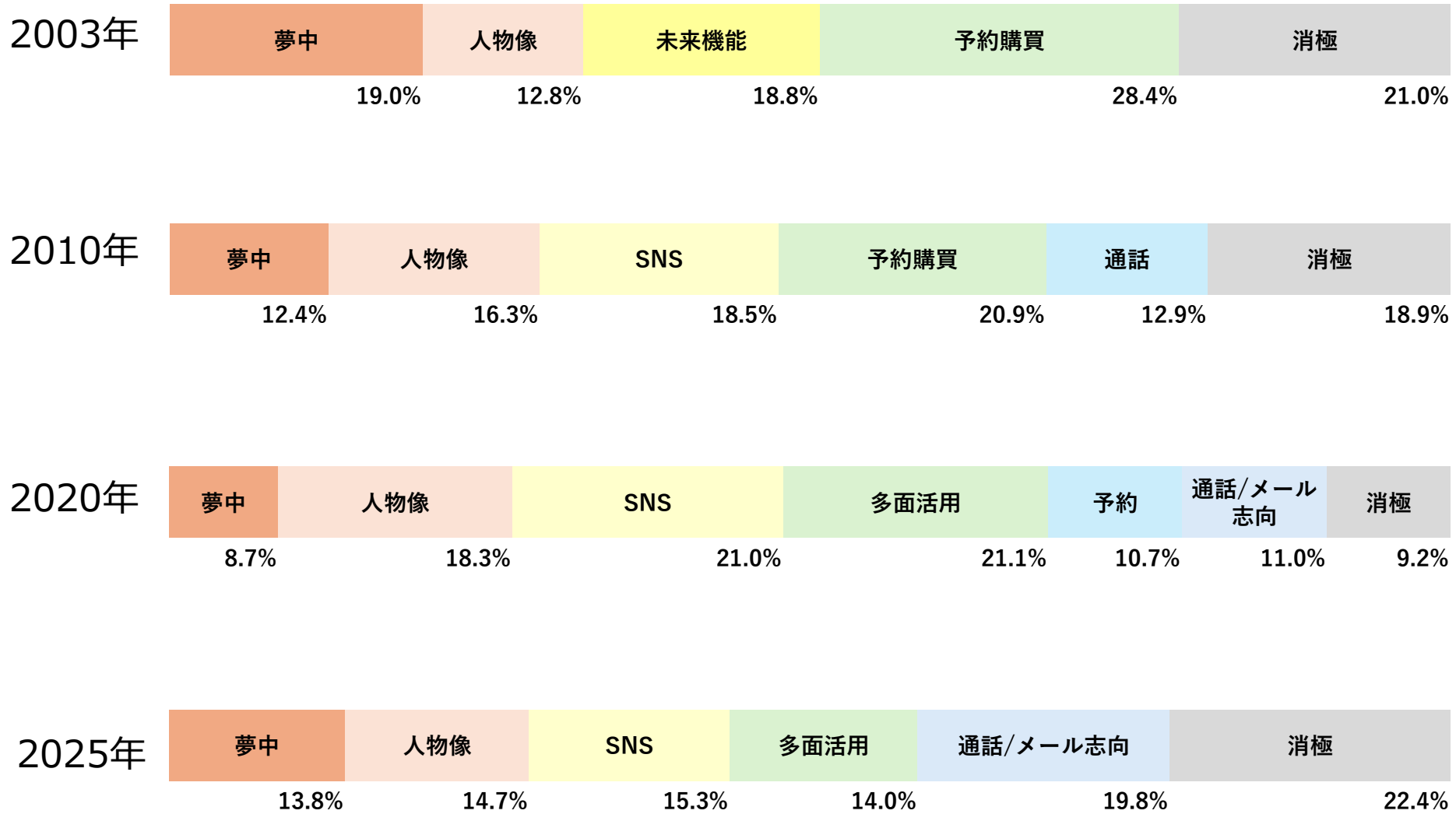
【参考】機能利用因子　経年変化

この5年の変化・・「予約」と「未来機能志向」が統合され「実用」、「未来志向」の誕生
2003年からの変化・・大きな変化はない。「人物把握」や「夢中」は2003年から変わらず抽出



【参考】機能利用クラスタ　経年変化

この5年の変化・・構成比の変化。「夢中」と「消極」が減少傾向から増加へ。
高齢者のスマホ移行とその理由が「能動から受動」へ変化。



ご清聴ありがとうございました